

すみずみまで歩いて感じた点のひとつは、高台と崖下との歴然とした差である。標高差はわずかなものであっても、隔たりは大きかった。格差を生んだ最大の要因は、「水はけ」の問題である。かつての東京は頻繁に水害に襲われた。河川の氾濫や低地への洪水をはじめ、都心部でも崖崩れが頻繁に発生した。地震の問題もある。この点も低地は不利だった。関東大震災では、高台の大半が震度五弱だったのに対して、低地の一部では震度七の揺れに襲われた。震源との距離は同じでも、震度に著しい違いをもたらしたのは地質である。地形とはかくも不平等である。土地に刻まれた記憶とでもいべきものを、地図とともに辿ってみたい。

北拈橋 きたはねばし



日比谷濠から江戸湊へ注ぐ。

かつて江戸城で使用する水は玉川上水を用いており、半蔵門から城内に取り入れられていた。昭和四十年（一九六五）に淀橋浄水場が廃止されるまで、玉川上水の残り水が半蔵門直下から一日五万トンも内濠に吐き出されていたのだ。内濠の水質が決定的に悪化するの昭和四十年

以降である。現在の内濠の水の九九・八パーセントは雨水だが、このほか地下鉄などから湧出する余剰地下水の供給を受けており、一日一〇〇〇トンに達する。

内濠の水質悪化には、下水流入も関係している。豪雨などで外部の下水の水位が高くなると、生活雑排水や尿尿を含んだ大量の下水が、お濠に流れ込むのである。流入口は、千鳥ヶ淵に二カ所、竹橋のたもとの清水濠と桜田濠に一カ所ずつ。内濠の平均水深は一・二五メートルで、清水濠にいたってはわずか七〇センチメートルというから、いったん汚れた水は致命的な汚染を引き起こすのである。



昭和七年（1932）九月まで、今の渋谷区は東京市外（豊多摩郡渋谷町）だった。当時は郊外の寒村だったのである。

山本権兵衛（ごんべえ）の本宅は、泉岳寺裏の芝区高輪台町にあり、全体の敷地は 1400 坪ほどで、日本家屋が建っていた。すぐそばには白金の海軍墓地（現在明治学院大学校地の一部もあった）

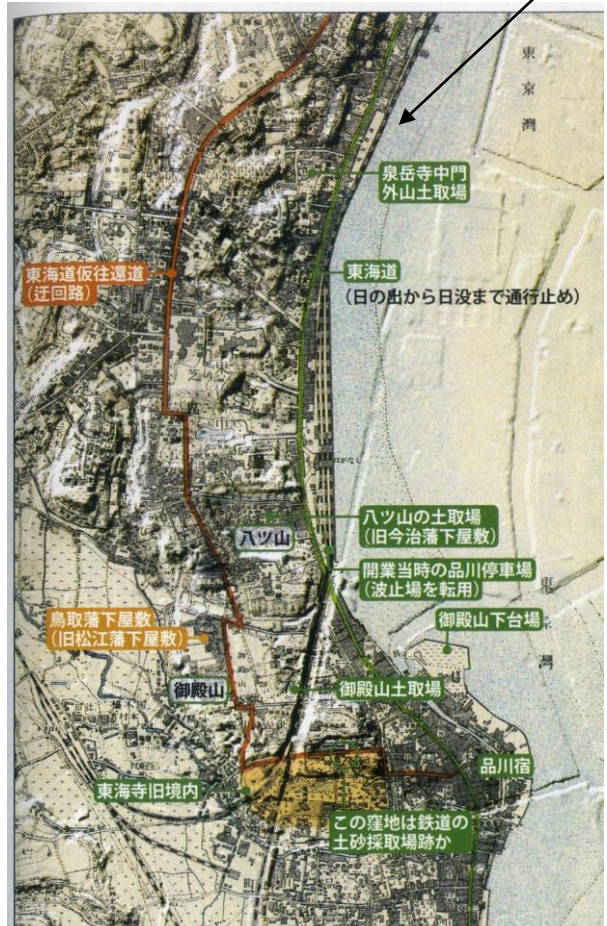


淀橋浄水場がなくなって皇居のお濠が汚くなっていたとは。

この長四角は、何だろう。最初は
駅だと勘違いした。



現在の品川付近 (1/1万「新橋」平成11年修正、「大井ふ頭」平成11年修正、
「渋谷」平成11年修正、「品川」平成11年修正 ×0.375)



明治後期の品川付近 (1/1万「三田」明治42年測図、「品川」明治42年測図
×0.375)

ではお台場を支えた大量の土砂はどこから採取したのか。これもわかっている。主として、「泉岳寺中門外山」「八ッ山」「御殿山」の三カ所である。そこが具体的にどの場所なのか。ここからは地形図の出番となる。東京都心部に関しては、じつは地形を大幅に改変するような開発は、江戸時代初期を除いてほとんど行われていない。そのため、地形の高低を子細に眺めれば、土砂を採取した場所が高い確度で推定できるというわけなのだ。

ペリーが江戸湾から姿を消して一ヵ月後の嘉永六年（一八五三）七月二十三日、幕府が総力を挙げた国家的プロジェクトが始まった。幕府は、ペリーと約した一年の猶予の間に、江戸の防備を急いで固めるつもりだった。

おのずと突貫工事となった。土取場と海岸を頻繁に往復する人足の支障となるため、海岸沿いの東海道は明け六つから暮れ六つ（日の出から日没）まで通行止めとなり、品川宿本陣から東海寺脇、御殿山、芝二本榎を経て芝札ノ辻（芝田町四丁目。現三田三丁目）にいたる迂回路が開かれている。

泉岳寺中門外山土取場の土砂はいったん泉岳寺中門外に集められ、泉岳寺前海岸に運ばれた。八ッ山にあった今治藩下屋敷土取場の土砂は、八ッ山下海岸の船着き場に運ばれた。御殿山だけ二つルートがあった。ひとつは、御殿山土取場から大横町・仮問屋場跡を経て利田新地かがたしんちへといたる。もうひとつは、御殿山土取場から善福寺境内を経て、東海寺黒門通から南品川獵師町にいたるルートだ。

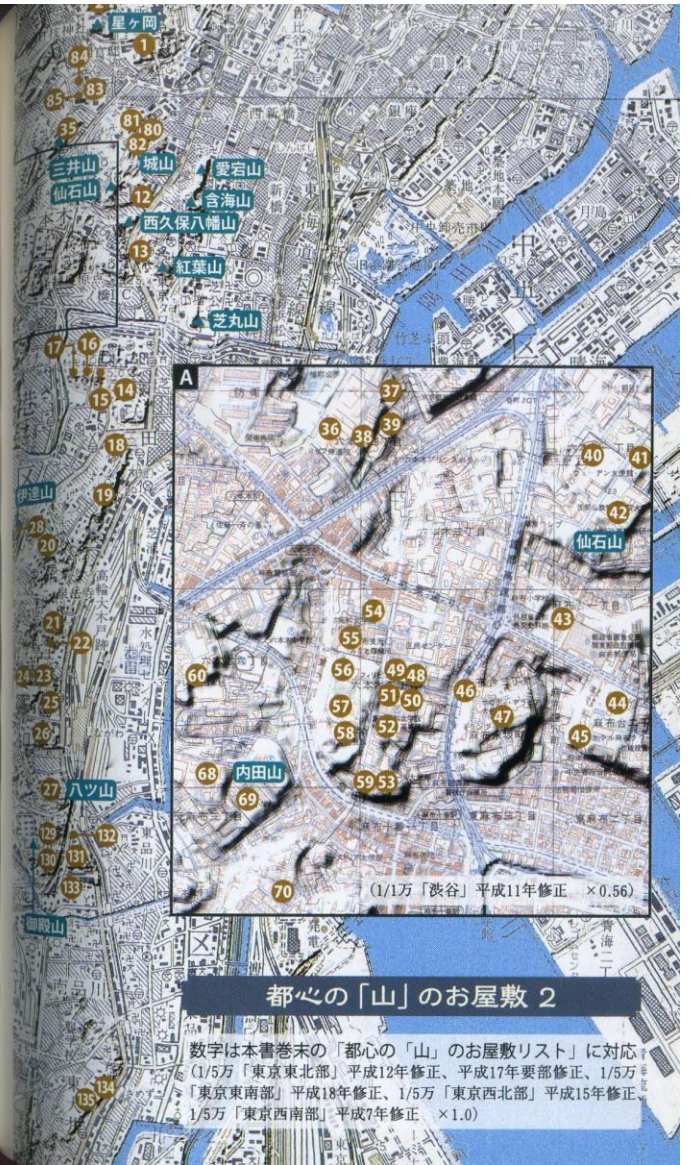
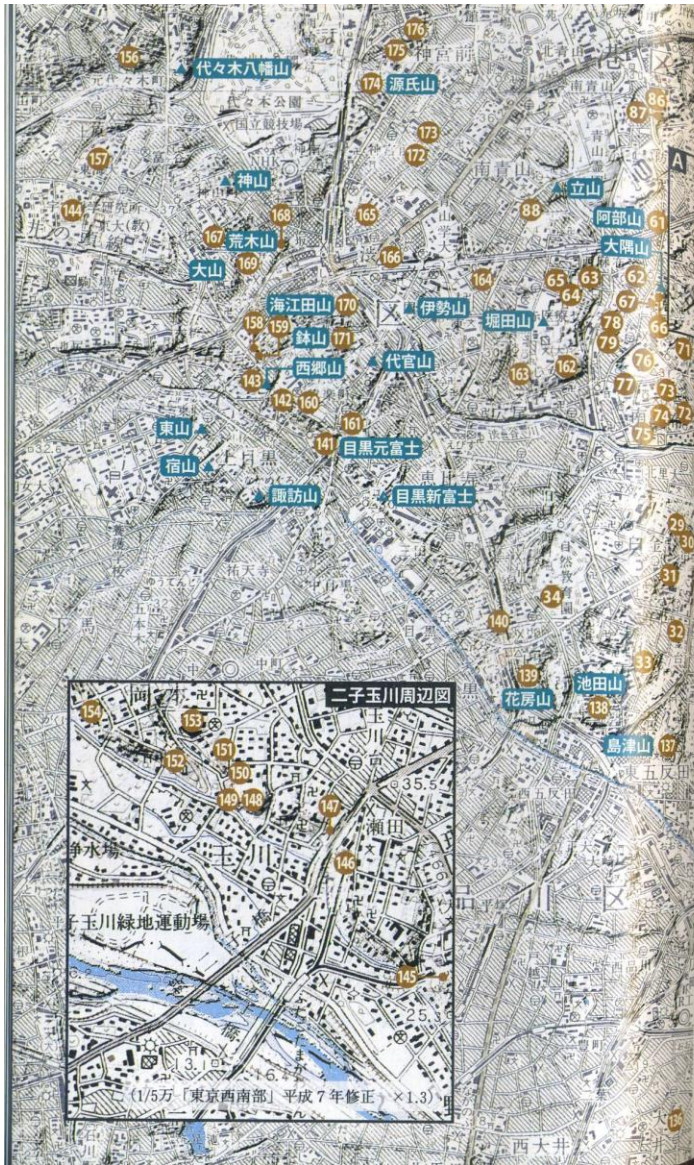


御殿山ガーデンの庭園は、かつての土取場跡。
明治中期以降、実業家として名を成した原六郎
の広大な邸地となった

御殿山ガーデンの庭園

のぞき坂 学習院大学近く

都心の「山」のお屋敷

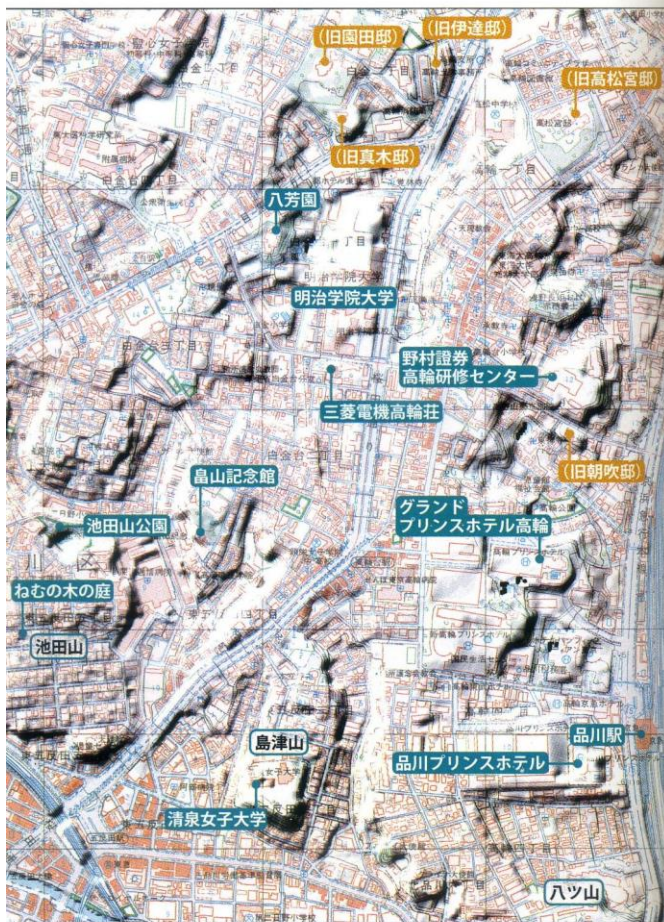


都心の「山」のお屋敷 2

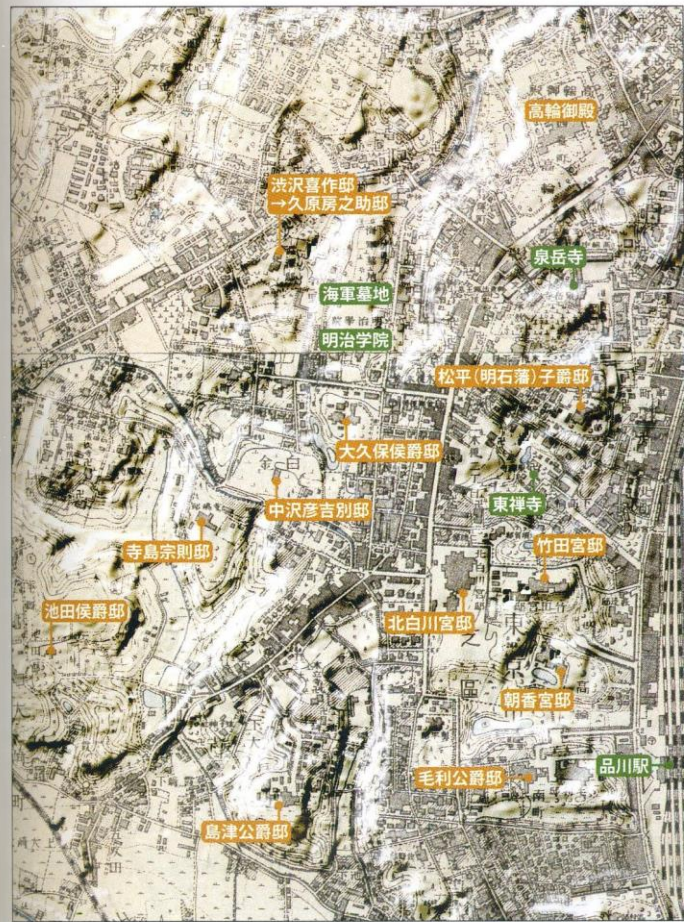
数字は本書巻末の「都心の「山」のお屋敷リスト」に対応
 (1/5万「東京東北部」平成12年修正、平成17年要部修正、1/5万「東京東南部」平成18年修正、1/5万「東京西北部」平成15年修正、1/5万「東京西南部」平成7年修正 ×1.0)

No.21 野村,22 東芝

	名称	頁	所在地	旧住所 (明治40年基準)	坪数	標高 (m)	現在のおもな用途	江戸時代末期の用途	過去のおもな用途
18	松平(高松藩)伯爵邸	142	港区三田3丁目	芝区三田三丁目	2416	20	香川育英会東京学生会寮	奥殿藩大給家下屋敷	
19	華頂宮邸(月の岬)	137, 158	港区三田4丁目	芝区三田台町一丁目	5377	29	塚公園、三田台公園	沼田藩土岐家下屋敷	イギリス公使館、内大臣官邸、防衛庁職員宿舎
20	高松宮邸	143	港区高輪1丁目	芝区高輪西台町		28	宮内庁管理	熊本藩細川家中屋敷	海軍病院、東宮御所、光輪閣
21	松平(明石藩)子爵邸	163	港区高輪2丁目	芝区高輪北町	10175	25	野村證券高輪研修センター	明石藩松平家下屋敷	山下太郎邸
22	朝吹常吉邸	163	港区高輪3丁目	芝区下高輪町	2811	22	東芝山口記念会館	東禅寺境内	東芝高輪クラブ
23	竹田宮邸	140	港区高輪3丁目	芝区高輪南町	11096	23	グランドプリンスホテル高輪	与板藩井伊家・日出藩木下家下屋敷	後藤象二郎邸、商工大臣・通産大臣公邸
24	北白川宮邸	140	港区高輪3丁目	芝区高輪南町	16133	29	グランドプリンスホテル新高輪、環状四号線用地	飯山藩本多家・薩摩藩島津家下屋敷	後藤象二郎邸、衆議院議長公邸、衆議院高輪議員宿舎
25	朝香宮邸(高輪南町御用邸)	140	港区高輪3丁目	芝区高輪南町	9776	13	SHINAGAWA GOOS、品川税務署	薩摩藩島津家下屋敷	後藤象二郎邸、東久邇邸、ホテルパシフィック東京
26	毛利(長州藩)公爵邸	161, 187	港区高輪4丁目	芝区高輪南町	22621	25	品川プリンスホテル	久留米藩有馬家下屋敷	ニュー毛利ホテル、品川スポーツランド
27	岩崎邸(八ツ山)	207	港区高輪4丁目	芝区高輪南町	13176	24	開東閣	水口藩加藤家下屋敷	伊藤博文別邸
28	伊達(宇和島藩)侯爵邸(伊達山)	172	港区白金2丁目	芝区白金三光町	6027	26	再開発地	芝村藩織田家上屋敷	東京都白金職員住宅
29	園田孝吉邸	172	港区白金2丁目	芝区白金三光町	6648	29	セイコーホールディングス社有地	米沢藩上杉家下屋敷	服部金太郎邸
30	真木長義邸	173	港区白金2丁目	芝区白金三光町	1435	27	竹中工務店白金竹友クラブ	白金村・今里村入会地	外務省白金分室(外務大臣公邸)
31	久原房之助邸	212	港区白金台1丁目	芝区白金今里町	4083	28	八芳園	薩摩藩島津家抱屋敷	渋沢喜作邸
32	大久保侯爵邸(芝大久保山)	171	港区白金台2丁目	芝区芝二本榎西町	23614	25	マンション、三菱電機高輪荘	芝村藩織田家・川越藩松平家下屋敷	半田邸、遠山芳三邸
33	寺島宗則邸	171	港区白金台2丁目	芝区白金猿町	6431	28	再開発地、島山記念館	森藩久留島家下屋敷	島山一清邸、料亭般若苑
34	朝香宮邸	142	港区白金台5丁目	芝区白金台町二丁目	11460	28	東京都庭園美術館、国立自然教育園	高松藩松平家下屋敷	海軍白金火薬庫、外務大臣公邸、白金迎賓館
35	三井(北家)邸(三井山)	23, 208	港区六本木2丁目	麻布区麻布今井町	13483	29	アメリカ大使館宿舎	松代藩真田家下屋敷・中村藩相馬家中屋敷	藤田邸、スウェーデン公使館
36	志賀直温邸	165	港区六本木4丁目	麻布区麻布三河台町	1682	29	ブリヂストンアパート	旗本一柳家屋敷	清泉寮
37	西寛二郎邸	165	港区六本木4丁目	麻布区麻布三河台町	1974	29	麻布第一マンションズ	旗本滝川家屋敷	甘露寺邸
38	島津(重富家)男爵邸	165	港区六本木4丁目	麻布区麻布三河台町	1058	29	ホームマットサン、高會	旗本屋敷	井上津之助邸、藤沢武夫邸
39	山内(容堂分家)子爵邸	165	港区六本木4丁目	麻布区麻布三河台町	1864	21	パークハウス六本木麻布三河台	糸魚川藩松平家下屋敷	青木科学研究所
40	住友吉左衛門邸	211	港区六本木1丁目	麻布区麻布市兵衛町一丁目	3371	30	泉ガーデン、泉屋博物館分館	山中藩大久保家上屋敷	旧鳥取藩主池田邸、麻布住友マンション



現在の白金・高輪 (1/1万「品川」平成11年修正、「渋谷」平成11年修正 ×0.6)



明治後期の白金・高輪 (1/1万「品川」明治42年測図、「三田」明治42年測図 ×0.6)

今でこそ土地利用は多様化しているが、明治の都心で高台の一等地を占めていたのは、「お屋敷」か、そうでなければ「軍部」か「学校」か「寺社」とみて、まずまちがいなかった。

いってみれば、高台に建てられた「格の高い」施設が、山の下に建て込む多くの小さな町家を睥睨していたのである。



江戸時代は月の岬という景勝地だった旧華頂宮邸（亀塚公園）東側の崖。高低差は20m以上ある



亀塚公園や三田台公園となった旧華頂宮邸だが、今も宮邸時代の外壁が残されている



空襲を免れた旧竹田宮邸洋館は、大臣公邸を経て、現在はホテル施設として使われている。かつては右側（西）に和館が接続していた

竹田宮家を継承した恒徳つねよし王（恒久王第一男子）の回想によれば、「私の家のすぐ下に品川駅がある。昔、そこには大きな機関庫があって、四六時中機関車の入れ替えなどが行なわれていた。当時は石炭を焚くのだからたまらない。海から吹く風がその煙を運んでくるので、近くの高台に住んでいるわれわれの鼻の穴はいつも真っ黒。（中略）しかし線路の向こうはすぐ海で、眺めは実によかった」（『私の肖像画』）。

官邸の建物の多くは空襲で焼け、残った洋館も取り壊されていったが、竹田官邸の洋館のみ

は、商工大臣・通商産業大臣の公邸を経て、昭和二十八年（一九五三）にプリンスホテルの所有となり、グランドプリンスホテル高輪「貴賓館」として今も使われている。



伊皿子坂上近くにある旧高松宮邸。住む人を失った今、門は堅く閉ざされている

迎賓館となった高松宮邸

たかまつのみやのぶひと

昭和天皇の弟、高松宮宣仁親王の邸宅は、高輪の比高一〇メートル以上の高台に建っていた。

よしのぶ

きくこ

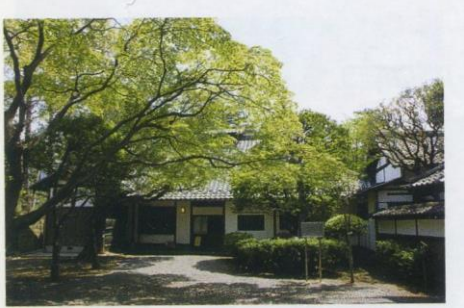
宣仁親王は、昭和五年（一九三〇）二月に徳川慶喜の孫である徳川喜久子（有栖川宮威仁親王の外孫）と婚儀を挙げ、昭和六年十二月、高輪台の新邸に移転する。ここは江戸時代、肥後熊本藩細川家中屋敷だったところで、明治維新後、海軍病院を経て、東宮御所などに使用された高輪御用地となっていた。宮邸から西に一〇〇メートルほど離れた都営住宅の一角に、吉良邸に討ち入りした赤穂浪士のうち熊本藩預かりの一六名が切腹した史跡が残っているが、戦前はこの場所も、その北の山麓に立地する港区立高松中学校も、かつての御用地だった。戦争をはさんで面積は半分に以下に縮小されたが、それでも敷地は周囲六〇〇メートル近くある。

建物は空襲から免れたが、高松宮夫妻は昭和二十一年九月に敷地内の別当（親王家の補佐役）官舎に移り、「東雲荘」と名づけた。それまでの御殿は貿易庁（商工省の外局）迎賓館となり、昭和二十四年十月から四十六年四月までは「光輪閣」（光輪倶楽部）として国賓の答礼晩餐会や内親王の婚儀などに使用されている。老朽化した光輪閣跡地に高松宮邸が新築されるのは昭和四十八年である。嗣子のいなかった高松宮宣仁親王と喜久子妃が薨去こうきょした今、宮内庁が管理する高松宮邸の門は堅く閉ざされたままとなっている。

華族令により、爵位は上から順に公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵と決まった。このときの叙爵内規によれば、公爵は、皇族から臣位となった者、公家では摂家、武家では徳川宗家。侯爵は公家では清華家、武家では徳川御三家と一五万石以上の大名、旧琉球藩王。伯爵は、大納言までの堂上家、徳川御三脚、五万石以上の大名。子爵は、維新前に家を興した堂上家と五万石未満の大名、男爵は、附家老や国主大名の分家である。そして、それぞれ「国家に勲功（偉

功) ある者」の項目が加えられた。勲功華族のはじまりである。

小坂邸 小坂順造 (信濃毎日新聞社社長、代議士)



奥多摩の名主宅から譲り受けた柱や梁を用いて古民家風にした旧小坂順造別邸（昭和13年完成）の玄関回り。大戦末期、崖下にあった茶室に横山大観が疎開していたこともある



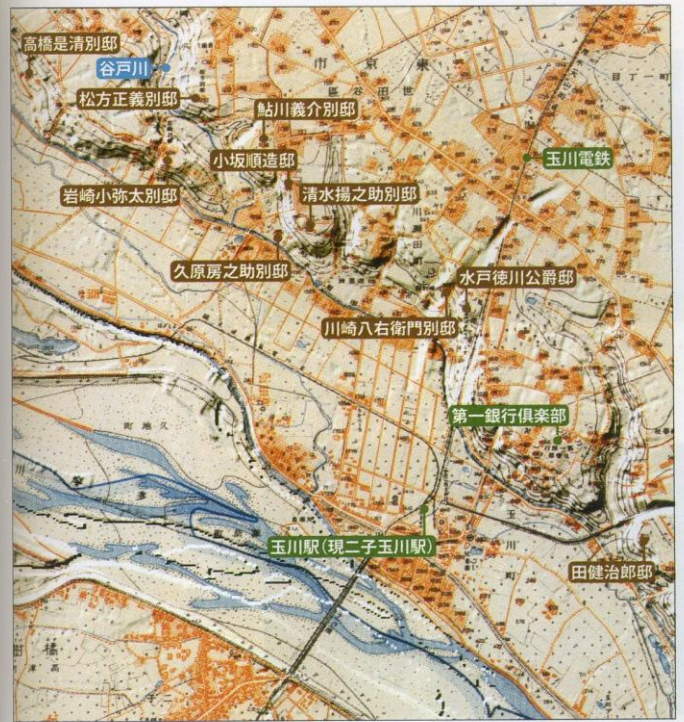
小坂邸のいちばん奥、寝室からサンルームを撮影。今でも冬の晴れた日には富士山が見える



現在の二子玉川 (1/1万
「自由が丘」平成11年修正、
「溝口」平成12年修正 ×
0.45)



二子玉川駅前から北に向けて撮影。左奥の木立は三菱の岡本静嘉堂緑地。今も崖下には豊富な水量の湧水が存在する



昭和初期の二子玉川の別邸群 (1/1万「二子」昭和12年第4回修正測図(空中写真測量併用) ×0.45)



二子玉川駅前から北東に向けて撮影。国分寺崖線がグリーンベルトとなっている様子がわかる

誰が言い出

したか、最近では「城南五山」なる言葉まであり、島津山・池田山・御殿山・八ツ山・花房山と列挙される品川・目黒周辺の「五山」は、どれも高級住宅地として名をはせている。

「城南五山」のなかでも、高級住宅地としてもっとも格が

高いのが、明治まで霞ヶ崎とよばれた池田山である。「池田」という名でわかるように、ここは寛文十年（一六七〇）以降、岡山藩地田家の下屋敷となり、広さは一萬坪以上もあった。江戸時代は、富士山や目黒川の眺めを楽しむ風光明媚な別邸として、賓客をもてなすために使われていたともいい、鴨場まであった。多くの大名が江戸時代の藩邸を手放すなか、明治以降も池田侯爵家そのまま所有し、本邸としている。昭和四年、敷地の大半が箱根土地の手で「池田山」として分譲され、以後高級住宅地へと変貌した。美智子皇后の実家である正田家もこの一角にあり、かつての邸地は「ねむの木の庭」として公開されている。標高約三〇メートルの池田山の北側斜面に、往時の大名庭園の面影を伝える池田山公園がある。窪地状の園地の底にある池泉回遊式庭園の池には自然の湧水もあり、ウグイスやクワガタムシも生息するという。

「城南五山」のひとつに花房山がある。所在地は池田山の北西、目黒駅の東側だ。播磨三日月

藩森家上屋敷だった比高二〇メートルの高台の山で、花房義質が子爵に陞しゅう爵した記念に購入した別邸である。花房義質は、岡山藩の旧臣で、外交官としての活躍が認められて爵位を得た勲功華族である。岡山藩出身だったこともあって、池田侯爵家の家政についても助言していたらしい。邸宅のあった高台は現在高級マンションが並び、山手線沿線とは思えない閑静な住宅地が広がる。

品川プリンスホテルの敷地は、もとの長州藩毛利公爵家の東京邸である。



高輪の旧毛利邸から八〇〇メートルほど北に位置する、桂坂に面した野村護券高輪研修センターのある一角は、城郭のような高石垣に囲まれ、まるで城砦を思わせる地形である。ここは明石藩松平家下屋敷で、明治以降は旧藩主松平子爵家の邸宅となった。桂坂をはさんだ反対側の高台には、帝国生命保険会社社長などを歴任し、三井財閥の大番頭格だった朝吹常吉の邸宅が大正十四年に建てられた。建築家ウィリアム・M・ヴォーリスが設計し、早稲田大学教授の内藤多仲（東京タワーなどを設計）が構造計算したスパニッシュ様式の建物である。

麻布 筈町こうがいちょう

莫大な富を蓄えた実業家も、やはり山の上に邸宅を求めた。三大財閥の邸宅はその最たるものである。政商として名をはせた三菱創業者岩崎弥太郎の弟で、二代目総帥となった岩崎弥之助の高輪邸は、現在も**関東閣**かいつかくという名で三菱グループが保有している。この土地は、近江水口藩加藤家下屋敷を**伊藤博文**が**本邸**としたところで、明治二十二年（一八八九）に伊藤から譲り受けた岩崎弥之助が、広大な敷地にコンドル設計の洋館を建てた。駿河台に本邸を構えていた弥之助は明治四十一年にこの地に移るが、洋館の完成を見ることなくその年病没。その後は子息の小弥大の別邸となったが、昭和十三年（一九三八）に三菱合資会社に提供され、今にいたるまで迎賓館として用いられている。線豊かなこの一角は、御台場築造や鉄道建設で切り崩された八ツ山の面影を唯一残しているといっている。

~~~~~



~~~~~

<http://www.kaitokaku.jp/>

~~~~~